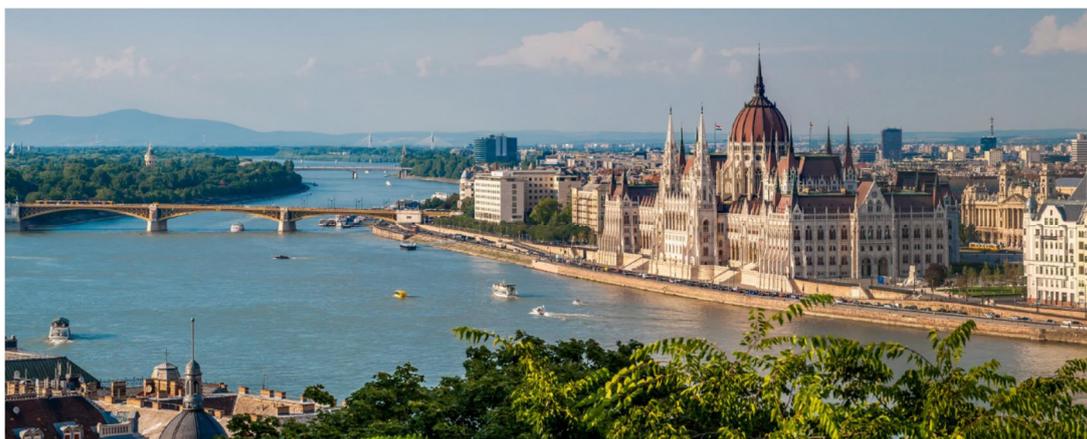


ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.10

5月31日

強い大坂なおみが戻ってきた

— 2024年全仏オープン観戦記

苦手な赤土コート

女子2回戦で大坂は世界ランク1位のシフォンテックと対戦した。シフォンテックは全仏オープン2連勝中で、今年も好調を維持して三連覇を目指している。それだけにたいして、大坂はトーナメントに復帰して以降、目立った成績を残していない。そもそもトーナメント出場数が少なく、試合の場数を踏んでいない。しかも、全仏の赤土コートをもっとも苦手とし、3年前の全仏（2021年）では1回戦勝利後の共同インタビューを拒否して批判され、2回戦を棄権したいわくつきの舞台である。関係者の多くはシフォンテックの楽勝を予想していた。

2024年5月31日

大坂の武器は男子並みの強いサーブとストロークだが、赤土ではコートに落ちたボールの勢いが急激に減速する。ハードコートではパワーで相手を圧倒できるが、赤土のコートでは 190km/h を超えるサーブでも、エースを取れずにボールが戻ってくる。ハードコートでは相手のミスを生かす強い打球も、赤土では難く戻ってくる。さらに、土のコートではボールがイレギュラーにバウンドすることが多い。だから、土のコートでは忍耐強くストロークを繋ぎながら、攻撃チャンスを探る我慢の戦いが必要になる。パワーテニスの選手にとって、赤土のサーフェイスは勝手が違う忍耐を要するコートなのだ。

ゲームの印象

赤土コートで大坂と対戦する選手は、簡単に強打されないようにハイボールを多用し、粘り強くラリーを繰り返して大坂をイラつかせる戦法をとる。2020 年のフェド杯対スペイン戦で、大坂はこの戦法にまんまと引っかかった。ランキング 78 位のソリベストルモに 0-6、3-6 で完敗し号泣した。ソリベストルモはとにかく左右に走って徹底して球を繋ぎ、緩いハイボールで返球する。大坂は一撃で決めようと強打するが、勢い余った打球がコートを外れる。これが繰り返され、忍耐力を失った大坂が試合放棄に近い形で完敗したのが、この年のフェド杯である。大坂には赤土コートに良い思い出がない。

出産を経てテニスへの情熱が再び湧き、トーナメントに復帰した大坂は、出産前に比べて精神的に安定しているように見受けられる。ポイントを失っても、以前のように落胆の表情を表に出すのではなく、落ち着いて試合に向かっている。シフォンテック戦ではサーブの調子が良かっただけでなく、ハードコートの試合のように、強いストロークがシフォンテックに圧力をかけていた。試合をとおして大坂は 6 分程度優位に立ってゲームを進め、シフォンテックは最後までナーヴァスになっていた。

第 1 セット、大坂は先にブレイクされながら終盤にブレイクバックして、タイブレイクに持ち込んだ。判定勝ちともいえる優位性を保っていたが、タイブレイクでは簡単にポイントを失い、第 1 セットを失った。これまでの大坂であれば、心が折れて、この時点で試合の大勢は決まった。ところが、である。第 2 セット初めから第 3 セット 5-2 となるまで、大坂は実に 14 ゲーム中 11 ゲームを取る無双状態になっ

た。そして、シフォンテックがサーヴィスキープし、5-3 となったところで、大坂の serving for the match (第3セット第9ゲーム目) となった。

ゲームカウント 5-3 はワンプレイクの差である。ここで大坂が強いサーヴで押し切れれば試合は終わる。しかし、このサーヴィスゲームを落とせば、シフォンテックはイーヴンの状態に戻せる。大阪が押し切るか、それともシフォンテックが最後に意地を見せるかの局面を迎え、大坂にやや力みが出た。ストロークはボール 1 個分だけ長くなってラインを割り、ファーストサーヴィスが入らない状態になった。勝負を諦めず、必死にボールを繋いだシフォンテックが、土壇場で大坂のサーヴを破り 5-4 となり、シフォンテックのサーヴとなった。

大阪はさらに力んだためか、ここから連続して 3 ゲームを失ってしまった。5-2 の状態から数えると、実に 5 ゲームを連取され、試合をひっくり返されたのである。テニスの試合ではたまに起きる大逆転劇だが、それまでの流れをみれば、ほとんどの人は大坂の勝利が確実だと見ていた。逆転劇が展開された最後の 4 ゲームの攻防は見応えがあった。グランドスラム大会決勝戦を見るような激しい攻防だった。

大坂は負けたとはいえ、苦手の赤土で、世界ランク 1 位を相手に互角以上の戦いを展開した。全豪オープンでタイトルを獲得した時のような勢いがみられた。中継していた Eurosport チャンネルのコメンテーターも、この試合を観戦していた選手たちも、強い大坂が戻ってきたことを実感した試合だった。多くの専門家もファンも、女子テニスでシフォンテックの一人勝ちを阻む選手が出てきたことを歓迎する感想を述べている。

何が変わったのか

大阪が出産でコートを離れている間に、有望な若手選手が出現し、大坂並みの強いサーヴを打つ選手が多くみられるようになった。シフォンテックもまた、弱点のサーヴ力を改善するために特訓を行い、ファーストサーヴの速度は 180km/h を超えるようになった。サーヴのイプスで苦しんでいたオスタペンコも、サーヴの安定性を増すトレーニングを重ねてきただけでなく、スピードを上げるトレーニングを行ってきた。その結果、サーヴスピードは 10-15km/h ほど上げることに成功している。

女子のサーヴスピードが上がるにつれて、サーヴを返すリターン力（デイフェンス力）が重要になっている。ラケットを振り切らず、面だけを合わせて返すブロッ

クリターンの技術を高めないと、速いサーブには対抗できない。これはストローク戦で劣勢に立った時に返球にも言える。面だけを合わせて低く返すか、スライスを打って、相手にチャンスボールを与えないようにしなければならない。

大坂はこの二つの技術で、まだ発展途上にある。この試合では何度かスライスを使う場面があったが、もともと力戦型の選手なので多用していない。赤土のコートではこの技術が勝負の分かれ目になる。

もう一つはセカンドサーブである。対シフォンテック戦の大坂のファーストサーブの平均速度は 184km/h である。これは男子並みのレベルで、錦織、西岡、望月より速い。ところが、セカンドサーブのそれは 140km/h で、サーブスピードが 50km/h も落ちる。大阪が苦戦する時は、大方このセカンドサーブを叩かれる場合だ。セカンドサーブになると、並みの選手になってしまうので、そこが相手の狙い目になる。

全仏での大坂のセカンドサーブには改善が見られた。ボールに回転を与えて変化を付け、高く跳ねるサーブを打つ技術を身に着けた。時には、リターンエースにならないように、160km/h 前後のセカンドサーブを打っていたが、これはほとんどフォールトになっていた。このスピードでセカンドを打てるようになれば、これも男子並みのスピードになる。これからはさらにセカンドサーブに磨きをかけ、簡単に叩かれない工夫が必要になる。コースを狙う、さらに回転を高めて高くバウンドさせるなど、相手に打点を絞らせないセカンドサーブを打つトレーニングが必要だ。

パワーで押すタイプの大坂選手に、器用さを求めるのは難しいが、現在のハイレベルな女子テニスの世界で、再び頂点に立つためには一本調子の力戦型では限界がある。だから、さらに練習を積み、不得意な打法や弱点を克服することが課題になる。

日本人選手の現状

残念ながら、錦織選手はすでに限界に達している。ストローク力と勝負勘は依然として高いレベルを保持しているが、如何せん、パワーが決定的に不足している。ファーストサーブの平均速度は 160km/h 前後で、多くのファーストサーブは 150km/h 台だった。プロ野球の投手の事例で言えば、直球のスピードが 130km/h 台である。いくらコントロールが良くても、直球に威力がなければ簡単に打たれてしまう。

2 回戦で対戦した剛球サーヴァーのシェルトン選手のファーストサーヴの平均速度は 201km/h、セカンドのそれは 183km/h である。ストローク戦で互角の戦いができて、サーヴ力にこれほどの差があれば試合に勝つことはできない。予選勝上りの選手（ランキング 166 位のカナダの選手）との 1 回戦で 4 時間を超える試合になったのも、サーヴでポイントをとる力がないからだ。1 ポイントを取るのに、長いラリーをしていたのでは体力が続かない。1 試合だけで慰労困憊しては、トーナメントを勝ち進むことはできない。

2014 年に全米決勝に進出した錦織選手は、「もう勝てない相手はいない」と豪語したが、そこからジョコヴィッチやナダルはサーヴ力を上げ、錦織との差を広げていった。それにたいして、錦織はストローク力を上げるためにマイケル・チャンをコーチに迎えたが、これが裏目に出た。錦織に足りないものはストローク力ではなくて、サーヴ力を高めるための身体能力の強化だった。しかし、錦織はフィジカル強化が課題だと自覚することはなかった。怪我が多いのはフォームに問題があるという日本人コーチの助言を受け入れ、サーヴィスフォームの改善に取り組んだが、その後に出場した試合で早々に肩を痛めてしまった。何のことはない、フォームの改善ではなく、フィジカル強化が必要だったのだ。

望月慎太郎選手（2019 年ウィンブルドン・ジュニア優勝）は、1 回戦で第 8 シードの剛球サーヴァー、フルカチと 3 時間にわたるフルセットの戦いを展開した。パワーで圧倒するフルカチにたいして、望月は巧みなストロークを駆使して、第 3 セットを終えて 2-1 とリードした。しかし、第 4 セットは 0-6、最終セットは 3-6 と力尽きてしまった。最後は完敗状態になったが、大健闘と言えるだろう。

細身の望月選手はパワーで劣るが、相手の力を借りたりターンがうまい。とくに球速が遅くなる赤土コートではその持ち味が生きてくる。しかし、パワーの差は歴然としていた。フルカチ選手のファーストサーヴの平均速度が 195km/h、セカンドのそれが 164km/h だったのにたいし、望月選手のファーストサーヴの平均速度は 171km/h、セカンドのそれは 133km/h だった。まだ 20 歳の望月選手にはもっと身体能力をつけてもらいたい。今の体は鉛筆のような細身である。俊敏さを失うことなく、筋力を付け、たくましい体を作ってもらいたい。

この問題は日本人選手全体について言えることだ。現代のテニス界で、身体能力に欠け、サーヴ力がない選手が上位に進出できるチャンスはない。大谷選手のよう

に、身体能力強化のために、ウエイトトレーニングを含めたフィジカルトレーニングを怠らないことだ。

幸い、男子では坂本怜選手（2024 年全豪ジュニア優勝）が高い身体能力を持っている。190cm を超える長身から放つサーブは軽く 200km/h を超える。今はまだ体の線は細いが、これからウエイトトレーニングを積んで、一回り大きな体でパワーを付けて欲しい。

女子の内島萌夏（もゆか）選手は 170cm を超える身長で、身体能力が高い。今年の全仏では予選 3 回戦を勝ち抜き、本選でも初戦で勝利（4 大会大会シングルス初勝利）した。2 回戦で世界ランク 2 位の強敵サバレンカと対戦し、世界のレベルを体感することができた。試合後のインタビューで、「ファーストサーブが入ると、それなりに戦うことができた」と答えている。実際、対サバレンカ戦のファーストサーブの平均速度は 169km/h で、これは女子選手の中では高いレベルにある。セカンドサーブのそれも 142km/h だから、それほど見劣りがしない。内島選手の課題は相手の速いサーブに対するリターンにある。相手のファーストサーブで得たポイントは 26%（47 サーブ中 12 本）、セカンドのそれは 28%（18 サーブ中 5 本）にとどまっている。大坂選手と同様に、サバレンカ選手はパワーで押してくる選手だが、やはり世界の上位で戦うためには、相手のパワーに負けない身体能力やリターン技術を身に着けることが肝要なことが分かる。

望月選手、坂本選手、内島選手の今後の健闘を期待したい。